

## アジアの両端と島国日本

安 陪 等 思

機会をいただき、Anatorian Course of Interventional Neuroradiology に脳神経外科の広畑助教授と参加させていただいた。トルコのイスタンブールのスイスホテルで開催された会はライブデモンストレーションが満載のもので、日本国内では使用できない器具や薬品を用いた目新しい治療を見せていただき、有意義であった。朝から夕方まで、スケジュールはびっしり詰め込まれていて、遊びに出かける暇はGala dinner 以外はないものであった。ここまで来て、それではあんまりと思い、半日だけさぼってイスタンブール市内を歩いて回った。

イスタンブール市はボスフォラス海峡を挟んでヨーロッパ側とアジア側に分かれている。ヨーロッパ側には新市街と旧市街があり、その間に金角湾がある。そこに架かる橋を歩いてわたっていると（図1）、絵はがき売りの二人づれの男たちが近づいてきて

「1ドル、1ドル」

と日本語で声をかけてくる。無視して歩いていると

「ただ、ただ」

と言って近づいてきては、絵はがきを目の前に差し出して視界を遮っておいて、私の胸ポケット中からデジカメを取りだしているではないか！ボロのデジカメで重かったので気が付いたが、薄型で軽量のデジカメだったらやられていたかもしれない。危機を脱して橋を渡り、地下道にはいると、まるで花火大会の時の水天宮のような人混みに圧倒される（図2）。そこはまるでアメ横の様な小さな商店が雑多に集まったところで、熱い熱気を感じる。先ほどの経験から私には誰もがスリに見える。

王宮やモスクなどの景色や展示物は美しいが観光案内書にその説明は譲ろう。その近くを歩いているとまずは韓国語で呼びかけられる。韓国の景気がよい証拠か、走っている車の多くは韓国製である。それを無視していたり、日本語の地図を見ていたりすると日本語で声をかけてくる。アジアの反対側の言葉を複数操るわけだ。それも胡散臭い男だけではなく、母親連れのスーツを着たお兄さんなんかもズーッと声をかけながらついてくる。観光案内書にはそのようにしてペルシア絨毯を高く売る輩が出没すると書いてあったが、出没どころか、次から次へと現れる。

「どこに行くの？」

「ブルーモスク」

と答えると

「今日はブルーモスクはお休み。入れないよ」

などと言うが、振り切ってブルーモスクへ行けばちゃんと開いていた。

親日的なトルコというイメージは吹っ飛んでしまった。活気に溢れて、強く、しぶとく生きていく群集というイメージが植え付けられた。ついではあるが、東郷ビールを見つけることができなかつたのが残念だった。

トルコから帰って翌月に一泊二日の医局旅行で釜山へ出かけた。博多港から例の鯨にぶつかることがあるという高速船であつという間に到着する。海岸近くから山の斜面に沿ってビルディングが立ち並ぶ、さすがに韓国第2の都市と思わせる大きな港である。日本では経験できない射撃などを楽しんで、夕食は韓国焼肉へ、全員で行った。

そう、それはまさしく我々が注文したのだ。追加の肉やタコにウーロン茶、ビール、そしてマッコリ。そして帰るときに追加したものの単価がべらぼうに高いことを思い知らされる。医局長は急患のエンボリで来ることができなかつたが、ある意味、幸いだったかもしれない。なんと18万円以上もその（特に高級と言うわけでない）焼き肉屋で支払うことになってしまったのだ。他の所ではビールなんかをたくさん頼んでも3から5万円程度の追加料金だった。まさに40名もの集団でほられたのだ。

医局旅行は楽しく、偽物売りの場所では安物買いを楽しんだが、これもよく考えてみると本物だと17万円の靴を1万6千円といわれ、これを3千円値切ってもうけたような気になっていたが、国内で1万3千円も出せばそれなりの靴が来る。これってもしかしたら、3千円くらいの靴じゃないか？それを教授と私が買っていた。月曜日に二人ともその偽靴を履いていたので「教授も助教授も偽物じゃあ駄目ですね」と大笑いになった。教授はその後、偽物は履かれていないようだ。私の足にはよく馴染むので、私は使っている。まあ、その辺が偉くなる人との違いであろうか。

アジア大陸の両端の空気を吸って、両方で大陸人の抜け目なさを感じた。古来、大陸における戦いでは勝者は敗者を（本当に）根絶やしにして、後顧の憂いをなくす。どこかに一人でも末裔が残っていると（それも本当かウソかも分からないと思われるのだが）、数年もしくは十数年の後には逆襲にあうこととなる。間抜けな奴は簡単に滅びる歴史を繰り返してきたのである。まあ、日本人のように海に囲まれて呑気に生きてはいけないわけである。

例えば中央を北京と東京、その陸続きの端を朝鮮半島と鹿児島、その先の島を日本

と沖縄と置きかえて比べてみよう。我々が沖縄に出かけるとそこではのんびりとした時間が流れていると感じるように、大陸の人が日本を訪れるとそう感じるのではないだろうか。その辺境の地でのんびりしていたはずの日本人がなぜか急に力をつけて大陸を侵略した。そして、間抜けにもいろいろな記憶を残したうえで、しっぽを巻いて逃げ帰っている。そのうえで、もう何十年も前のことをいろいろと蒸し返したり、謝らせようとさせたりするなど言っている。立場を変えて考えてみよう。沖縄の琉球王朝に明治維新のようなことが先に起こって、近代的な軍隊が作られる。そして、あっという間に幕府が倒されて日本が占領してしまう。その課程の中では多少の虐殺もあるでしょうし、その記憶はそう簡単に消せないことだろう。たとえ、その後日本が力をつけたり、他の国に助けられたりしながら領地を回復したとしても。今度は琉球国が著しい経済成長をして日本に多くの資金援助をしたとしても、占領中に生まれたネガティブな記憶、記録に対する恨み辛みが残っていることは想像に難くない。そうは思わないですか？まあ、見下していた連中にやられると言うことは民族的なプライドをいたく傷つけられたことになることはよく分かる。でも根本的な間違いは見下していたと言うことだと思う。それでも日本人だったら個人的な恨みで終わっているかもしれない。罪を憎んで人を憎まずということもできるかもしれない。

おそらく大陸の辺縁から更に海を渡った先の島国の我々は自分たちのスタンダードが世界的なスタンダードで大陸の人たちがエキセントリックと思っている。でも、きっとそうではない。同じアジアの人びとと言うほどに同じじゃなく、アジアの辺縁の国は生き残るためのすべとして、そのような素地を保っているような気がする。我々は島国でのんびり過ごしている人種で、世界の中では相当に変わったお人好しの集団なのではないか。

帰国して直ぐにイスタンブール空港でテロによる爆発火災が起き、その後、トルコ軍とギリシア軍のF16（アメリカ製の戦闘機）同士が空中衝突するという事件が起きた（どこでも隣の国とは仲が悪いと田中先生が言っていたのにうなずけた）。トルコはEUへの加盟を望んでいたが、雲行きは怪しくなっている。トルコに行かなければ気にならないようなことも気になるようになった。また、韓国も大統領の不人気は極まりつつあるようだ。国民の意識をある一定の方向に向かせる手段として、日本を利用したくなる様な状況となっている。余談だが、あの国は大統領を辞めた後に必ず逮捕される。我々から見ると不思議なお国柄である。蛇足ではあるが、私はトルコや韓国に悪意を抱いているわけではない。もちろん沖縄に対してもである。第三者的に眺めてみたり、例としてあげさせてもらっただけである。

アメリカ的な価値観が国内に広がり、それが日本向けに修正されたものを世界基準だと幻想を抱いている我々はほかの多くの国の人から見ると非常に変な国なのかもしれない。それは良い場合もあれば、悪い場合もあるであろう。ただ、今の日本は世界の中で特に恵まれた平和と繁栄の中にいると認識して、それを当然とは思わずに、それが続くための努力を怠ってはいけないのではないだろうか思う。



イスタンブール市街



ボスポラス海峡を背にして